
未来ある「持続的」な酪農を目指して

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科 4年 原田 大二郎

「日本酪農の現状」

日本酪農について1980～2010年の30年間の統計を見ると、酪農家戸数は約11万戸から約2万2千戸に減少し、飼養頭数は約210万頭から約150万頭に減少した。また一戸あたりの飼養頭数は18.1頭から67.8頭に増加した。生乳生産量は1989年から800万t前後で推移している。これらのことから日本酪農は多頭飼養化、高泌乳化でここまで発展してきたと言える。

さて日本の酪農はこのままでよいのであろうか。TPPの問題、牛乳の消費低迷、輸入飼料価格の高騰など日本の酪農を取り巻く状況は年々厳しく、また複雑になってきている。私が特に問題と感じているのは、飼料についてである。それは飼料がこれまでの日本酪農を発展させてきた重要な要素であり、また酪農経営において不安定要素でもあるからだ。小稿では飼料面から、未来の日本酪農の在り方について考えていきたい。

「日本は輸入飼料依存体質」

牛乳は100%国産である。これは紛れもない事実である。では牛に与えている飼料は100%国産なのだろうか。飼料には大きく分けて2種類、粗飼料と濃厚飼料があるが、粗飼料の国内自給率は現在約90%、濃厚飼料は約10%であり全体の飼料自給率で見ると約25%程度である。濃厚飼料に関してはほとんどを輸入に頼っていることになるが、これは大変危険な状況である。農林水産省の2020年における世界の食料需給見通しに関する分析によると「世界の食料需給は、中長期的には人口の増加、所得水準の向上等に伴うアジアなど新興国・途上国を中心とした食用・飼料用需要の拡大に加え、バイオ燃料原料用の農産物の需要の継続的な増加も要因となり、今後とも穀物等の需要が供給をやや上回る状態が継続する見通しであり、食料価格は2007年以前に比べ高い水準で、かつ、上昇傾向で推移する見通しである」と述べている。つまり、これからの酪農経営において飼料は、極力自前の農地で生産するということが安定的に経営する上で重要であり、現在のような輸入飼料依存型の酪農経営ではどんな規模の酪農家でも存続していくことは難しくなっていくということである。また養分循環の観点から見ても輸入飼料依存は問題である。牛を飼えば必ずふん尿が発生するが、輸入飼料分のふん尿は元の農地に還元することはできない。つまり日本の農地に過剰に還元してしまうことになり、それが温暖化ガスの発生や地下水の汚染などの環境問題につながる。

そこでこれらの問題を解決するため飼料自給率を高める必要があるが、粗飼料に関しては、

稲発酵粗飼料、青刈りとうもろこし等の増産により今後国産100%を達成することが十分期待できる。濃厚飼料に関しては、現在国内自給率10%程度であり、現在輸入している飼料用穀物を国内で生産しようとする、耕地面積が約430万ha必要となる。これは日本の全耕地面積456万haから見ても、現実的に無理である。しかし少しでも自給率を向上させることが、日本の酪農を強くすることにつながるの言うまでもない。

「水田酪農の可能性」

では飼料自給率を向上させるには具体的にどんな方法があるだろうか。例えば食品工場などから出る未利用資源の活用も自給率向上のため必要であろう。しかし基本的に飼料というのは、土壌から生産されるものである。すなわち、国内の農地で飼料増産すれば飼料自給率は向上する。では日本の限られた農地からどう飼料を生産するのが良いのか。ここでは数ある方法の一つとして水田酪農を考えてみたい。ここで言う水田酪農とは乳牛の飼料基盤を水田にもとめ、稲作農業と酪農業を有機的に結びつけた農業形態である。詳しく言うと、田畑輪換と水田裏作に飼料作物を導入し、酪農経営に水田を積極的に活かしていくということである。また飼養頭数は水田からの飼料で飼養できる頭数に制限する。水田酪農は昔からある農業形態だが、輸入飼料、肥料の高騰や世界的にあらゆる産業で環境配慮が求められる現在、それらに対応するため水田酪農は今一度再考する価値がある。

水田酪農のメリットとしては次のようなことが挙げられる。飼料を国産に切り替えることができる（飼料の国産化）。日本の基幹農業である稲作を活性化し、限られた農地を効率的に利用できる（水田の高次利用化）。ふん尿や作物残渣が適切に農地に還元されることで地力を維持することができる（養分循環の確立）。水稻、牧草、穀物などそれぞれの特徴を組み合わせることにより、収量の増加、生産費の低下、土壌保全などの効果を得られる（酪農と稲作の相乗効果）。安定的で、再生産可能な酪農経営形態を営むことができる（持続的な酪農経営の確立）。以上のように多くのメリットが考えられる水田酪農だが、問題もある。大きな問題として農繁期における労働力の不足が挙げられる。この問題を解決するには個別経営では限界がある。そこで複数の農家による共同経営が必要となってくる。水田酪農において経営を安定させるには稲作部門、飼料作部門、乳牛管理部門などに分業化し、労働の分散、効率化を図っていくことが必要である。

これからの酪農経営を考えると、一番の問題になるのは飼料をどこから調達するかである。ならば日本が誇るべき豊かな水田土壌をもっと生かしていくことを考えるべきである。そのことが酪農はもとより、国の農業を守ることにつながる。飼料自給率向上のための一例として水田酪農を挙げたが、飼料生産について最も大事なことは、その地域の土壌、気候に適した作目、輪作体系を考え、その土壌の地力を損なわない程度で最大限の飼料を生産して

いくことである。

「明日の日本酪農をつくるために」

近年、世界規模の異常気象や土壌劣化などにより持続的な農業を営むことの重要性が再認識されてきている。「持続的」という言葉は農業にとって一つ理想郷「夢」ではなかろうか。安全安心な食料を生産し国民の命を守ること、健全な土壌、家畜を育み、次の世代に確実につないでいくこと、これが真に強い農業の在り方というのではないか。酪農もこの持続的な姿を目指さなければならない。しかし酪農家も人であるから、収入を得て生活を営んでいかねばならない。ここに理想と現実の隔たりがある。この溝を埋めるには生産者、消費者ともに歩み寄り、理解し合うことが必須である。

私が在籍する酪農学園大学では、建学の精神として「健土健民」という言葉がある。肥沃な土壌から生産される栄養豊富な作物を食すことで心身共に健康になるという意味である。健土健民の思想は酪農に通じる。健康な土から得た健康な作物で牛が育ち牛乳を生産し人がそれを食し健康な体を作り、また新たに土作りや牛作りに励む。全てはつながり循環している。この健土健民を体現することが、これからの日本酪農の課題である。

現在の日本酪農を見ていると、このまま多頭飼養化、高泌乳化を追い続けることが本当に正解なのかと考える。いや、正解というものは時代によって常に変わっていくものであろう。ならば私達が今の時代、何を酪農に望むのかということを考えなくてはならない。これには酪農業の枠を超えた国民全体の議論を積み重ね続けていくことが必要不可欠である。そして十分議論した上で日本の気候、風土に適した日本独自の酪農経営を確立すべきである。それこそが日本酪農の希望ある未来を創造していくと私は信じて疑わない。
